

友松夕香 著

『サバンナのジェンダー——西アフリカ農村経済の民族誌』

(明石書店、2019年)

評者 木曾 恵子

本書は、アフリカ農村地域における開発政策、とくに女性支援のあり方に対する問題提起を企図し、ガーナ北部の農村地域で暮らす男性と女性の生計関係の実態について、ジェンダーやその他の社会的役割、関係性から読み解こうとする民族誌的研究である。丹念な人類学的調査に基づいた「厚い記述」に徹した民族誌であると同時に、その成果を開発政策の議論へもつなげようとする意欲的な「開発論」でもある。豊富な質的データとそれを可能な限り数値化し、量的データとして客観的に評価する材料を提供することで、アフリカ農村地域の女性支援を根本的に問い直す必要性がありありと浮かび上がってくる労作である。以下に、本書の構成を示す。

序論

第1部 女性の耕作——サバンナの性別分業の大転換

第1章 農食文化の静かなる変容

第2章 仕事の変革

第2部 土地、樹木、労働力——資源をもつことの意味

第3章 「家」の営まれ方

第4章 侵略の歴史と領地の称号

第3部 とりに行く女たち、与える男たち——人口の増加と強化されるジェンダー

第5章 耕作物をめぐる男性、女性、子どもたち

第6章 料理の実をめぐる領主と女性たち

結論

序論では、まず先行研究批判と本書の目指すところが提示される。農業の低迷と人口の増加が続くアフリカ農村地域の女性支援をめぐる先行研究に対して、本書は2つの大きな批判を前提に議論を進める。1つは、フェミニズムと開発政策が女性の「従属」や「周縁化」、「資源配分の男女格差」を議論の前提としてしまっていること。もう1つは、そのために「農業の近代化政策を通じて周縁化され、男性が優位に立つ社会で経済的にも苦しむアフリカ農村女性たち」(p. 12) という典型像が確立し、実態を見誤った画一的な女性支援が続いている、という批判である。女性を支援する政策は、欧米の現状を踏まえがちなフェミニズム理論を前提にして、女性が自分で稼ぐ能力と機会を拡大させることで「ジェンダー平等」を実現しようとしてきた。しかし西アフリカのサバンナ社会においては、一夫多妻家族の複雑な生計関係は男女の権力関係だけでは説明しきれないとフェミニスト人類学者らに

よって指摘されてきたものの、その実態を明らかにする研究はなされないまま、女性の耕作を支援する政策は続けられてきた。以上を踏まえて、本書では、ガーナ北部・西ダゴンバ地域の農村の事例から、生計をめぐる女性と男性との関係性、およびそれがどのように変容してきたのかを検討し直し、開発政策と現地の人びとの暮らしの「ずれ」を描き出すことを目指している。

第1部では、西アフリカの内陸部サバナ地域における過去1世紀にわたる農村経済を取り巻く環境の変化を、公文書や新聞記事、および著者自身によるデータを史料として組み合わせ丁寧に説明する。1970年代まで女性は身体的、時間的制約からほとんど耕作に関与していなかったが、農村経済の「近代化」以降、着手するようになった。男性の耕作や出稼ぎだけでは、拡大する消費生活や環境の変化から入手困難になった穀物の購入に対応できない。また一方で鋤やトラクター、粉碎機の導入や貯水池の整備による料理、および水汲み時間の短縮などの技術的、物質的な変化がそれを後押ししたためである。開発政策の視点から見れば、たしかに女性は生産者として経済活動を拡大させてきた。しかし現地女性の立場からすれば、経済活動の拡大は、食材を調達する責任を負う女性が不足を補う必要に駆られた「やむを得ない」選択の結果であり、家計における女性の労働と支出の負担を増大させているのだという。

第2部では、ガーナ北部の農村の暮らしに不可欠である土地や樹木、労働力の配分のされ方を、一夫多妻の拡大家族を軸とする人びとの関係性のなかで、年齢や身分、性別に着目して検討する。資源を配分する家長の男性は、その配分を上手に調整せねばならない。妻たちを中心とする同居家族で調整し合い、ときには近隣の人びともにも利用させるなどの配慮をしながら、息子とともに「家」を維持しようと苦慮する家長の姿が浮かんでくる。また同地の代表的発酵調味料となるヒロハフサマメノキ (*Parkia biglobosa*) をもつ男性は、各地で人気の「領地」の称号を得た者であり、男性は妻を増やして家を大きくすることと同時に、称号の獲得によっても地位の向上を求められてきた。

第3部では、経済状況の変化にともなって、人びとが資源の分配をめぐる男女の関係性やジェンダー規範を再編していく動態を分析する。男性が女性に作物を直接的、間接的に分け与える状況の一つひとつ丁寧に掘り上げて検討していくことで、資源配分の「男女格差」が直接的に女性の収益の低さに結びついているわけではないことを明らかにする。人口の増加と農業の低迷が続き、必要に駆られた女性たちは、家族以外の男性の作物を積極的にとりに行くようになった。その結果、自身の社会的評価を下げないためにも、家族以外の女性や子どもたちに作物を振る舞う男性から「分け与えてもらう権利」を生み出した。こうした実践は、農村において「男は与える」という男性規範をも強めていった。一方で、食材の調達責任者である女性同士が分け与えあう相互扶助的なつながりは見出されない。全体的なとり分が減っているうえに、女性自身の労働量も増え、他の妻に負けぬように自らの責任を全うしなければならないのである。

結論では、フェミニズムと開発政策は、西アフリカ・ダゴンバ地域の女性たちを「支援」してこなかったのではないかと、という痛烈な問題提起を迫られる。本書の「厚い記述」とエミクな視点に徹した分析からは、厳しい生活環境のなかで人びとがそれぞれの地位や身

分に応じて仕事を分担し、資源を得て、収益を分け合うことで構築してきた男女の生計関係の不可分性が明らかになる。開発政策は、西欧的フェミニズムの理論や概念を無批判に前提にしすぎるあまり、現地の人びとの営みの複雑性を捉えようとしていない。そして、そのような認識の「ずれ」は、当該地域の女性にとっての利益や幸福をも見誤っている、と主張する。

本書の最大の特徴は、何よりも女性の労働をめぐる議論をそこに暮らす人びとの視点から捉えている点にある。綿密なフィールドワークと資料の渉獵、そして鋭い考察によって、本書は先行研究が看過してきた西アフリカ農村の人びとの生計関係の実態、とくに一夫多妻における男女間の不可分な生計関係を鮮やかに浮き彫りにしている。フェミニズム人類学や開発政策に一石を投じたのみでなく、西アフリカのサバンナ地域を対象とした民族誌、そして同地の首長制に関心をもつ人類学や地域研究の分野でも画期的な著作として評価されている。

ただししないものねだりを承知のうえで、西ダゴンバ地域の農村の人びとは女性への開発支援をどのように語るのか、その声のあげ方や主張内容にジェンダーはどのように関連するのか／しないのか、という本書を読み終えた後の評者の好奇心はあえて隠さずにいたい。実際、「女性たち自身は、彼女たちの耕作を支援するプロジェクト（農業技術、マイクロクレジット、女性のグループ化をとおした土地の再配分）を大歓迎して受け入れてきた」（p. 420）。ところがそれによってただでさえ子どもへのケアや家事、料理、小売業などで忙しい女性の家計における労働や支出の負担が増大してしまった。そして「当の女性も、家計での女性の負担を増やすようなかたちで、女性による新たな生産活動への『進出』や土地の配分の『男女格差』の軽減、そして耕作者としての『地位の確立』を求めてきたわけではない」（p. 420）という。それでは大歓迎して受け入れてきた耕作支援プロジェクトによる日常の負担の増大を、本書の登場人物たちは具体的にどのように捉えているのであろうか。おそらく、「彼女たちの夫や息子を対象に、彼らの畑の生産性を上げることが女性たちを支援する策として検討されないのだろうか」（p. 420）という疑問（あるいは希望？）は、著者だけではなく、現地の人びとから漏れ聞こえる声なのではないかと想像する。「複数の複雑なものをそのままに」（p. 30）描きたいという著者からすれば、当事者の言動に安易に主体性を求めてしまう研究者側の作為を回避したと考えるが、これだけの「厚い記述」がなされているのであれば、ぜひ開発支援や自らの福利（ウェルビーイング）（幸福と利益）に対する当事者の声を聴いてみたい。それは開発政策の前提と実態のずれを提示することにとどまらざるを得ない民族誌的研究がもつ可能性の1つではないかと考えるのは、評者のロマンチズムだろうか。

誤解を恐れずに言えば、本書が指摘するフェミニズムの概念枠組みへの問いは、著者も述べているように（p. 10）決して真新しいものではない。権力と労働に着目した女性解放を主張する西欧的フェミニズムの思想が、実は第三世界の多様な女性たちをある種のイメージで固定化してきたのではないかという問いは、フェミニズムのなかでも省察され続けてきた大きな課題である（モーハンティ 2012）。一方で、生産力をもてば女性の解放につながるという主張が、フェミニズム全体を貫く思想でもない。伝統的な自立観の問題性

を鋭く指摘し、依存をベースにした倫理を築き上げようと牽引しているのも、また多くのフェミニストである(トロント、岡野 2020)。本書の主張は、女性を経済的に強者にして生活を変革しようとするのではなく、不可分に依存し合っている人びとのあり方をそのまま尊重しようとする、後者の「フェミニスト」の主張にもつながるものではないかと考える。フェミニズムの思想と運動の内部では、かつて自らが規定した「女性」という集合的存在を乗り越えようと盛んに議論が行われている。にもかかわらず、開発政策の議論の場ではこうしたアカデミックな議論の展開が熟議されていないという本書が指摘する事実は、フェミニスト人類学が興ってきた背景とは何だったのかを改めて考えさせるものである。西欧的フェミニズムの理論や概念枠組みを相対化し、必要に応じて修正することが民族誌的研究の負うべき課題であり、いずれにせよ本書は舌を巻くほどの緻密なデータから「フェミニスト人類学の矛盾」に取り組み、その矛盾を乗り越えた民族誌の一例である。

文献・引用文献

- モーハンティ、C・T (2012)『境界なきフェミニズム』堀田碧監訳、菊地恵子・吉原令子・我妻もえ子訳、法政大学出版局。
- トロント、ジョアン・C、岡野八代 (2020)『ケアするのは誰か? 新しい民主主義のかたちへ』岡野八代訳、白澤社。

■ 評者紹介

- ①氏名(ふりがな): 木曾恵子(きそ・けいこ)
- ②所属と役職: 日本学術振興会・特別研究員(RPD)
- ③生年と出身地: 1976年、秋田市生まれ。
- ④専門分野・地域: タイ地域研究、ジェンダー論、文化人類学・タイ
- ⑤学歴: 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(東南アジア地域研究専攻)、地域研究博士(京都大学、2010年)。
- ⑥職歴: 東北大学東北アジア研究センター・教育研究支援者(2009～2011年)、京都大学東南アジア研究所・COE/特任研究員(2011～2013年)、宮城学院女子大学キリスト教文化研究所・客員研究員(2014年～)、宮城学院女子大学、東北学院大学他非常勤講師(2010年～)。
- ⑦現地滞在経験: 大学院在学中、タイ・バンコク、コーンケンで語学研修、国際交流基金のフェローとしてマハーサラカム県の農村で長期滞在調査を実施した。また現在まで、タイで断続的に短期調査を実施してきた。
- ⑧研究手法: インタビュー、参与観察によるフィールド調査。
- ⑨所属学会: 国際ジェンダー学会、比較家族史学会、日本文化人類学会、日本タイ学会。
- ⑩研究上の画期: 東日本大震災と自身の出産。「ケアする/される」ことから見えてくる社会のあり方に注目し、考えている。
- ⑪推薦図書: 萩原久美子、皆川満寿美、大沢真理編(2013)『復興を取り戻す——発信する東北の女たち』岩波書店。